

『明治期の言文一致と翻訳の言説生産』

LIBRARY IICHIKO 148 AUTUMN 2020 10月31日 発売予定



A5変形 128頁 定価(本体1,500円+税)

【監修・アートディレクター】
河北秀也(かわきた ひでや)
1947年生まれ。日本ペリエールアートセンター主宰。著書に『デザイン原論』など。
本誌プロデューサー、アート・ディレクター。

【編集・ディレクター】
山本哲士(やまもと てつじ)
1948年生まれ。
政治社会学、ホスピタリティ環境学。
主な著書に、『ミシェル・フーコーの思考体系』、『ホスピタリティ講義』、『国つ神論』、『くもの日本心性』、『高倉健・藤純子の任侠映画と日本情念』、『フーコー国家論』ほか多数。

「LIBRARY IICHIKO」は季刊誌です。次号は二〇二一年一月末発行予定です。

藤井貞和は、助辞は数千年生き続けるのに、助動詞の生命は五百〜千五百年をへて終わりを迎えると指摘している(『日本語と時間』)。これが明治期に起きた。しかも言表の繋がりにおいて、この二つは同時に「デプラスマン」されたといえよう。藤井が言うように「き、けり、ぬ、つ、たり、り」などが「た」一つになってしまった。他方、大槻文彦によって英文法からの主語制文法が日本語へ適用され、主語なき日本語なのに主語があると似非文法までが作られる。文法学者たちはsubjectにあれやこれやの訳語を当てて、「くが、言表(subject)のどこにも「主」なる概念はな。〈sub〉は「下、従う、副」など従属の意味なのに(つまり欧米語であれ述部が統率する)。翻訳家たちは、主語・述語・コブラの構文の翻訳に四苦八苦しながら、語を並べてつなぎ合わせるという蘭学以来の芸当をやっていた日本人である。文学者たちも漢文中心でありながら訓読で返し読み芸当をやっていた日本人である。文学者たちは、話し言葉と書き言葉の間の千里の逕庭への認識もなく、「です・ます」か「だ・である」かかと言表化の試みを多々なす(つまり述部表現への格闘。学校で、口語化の教育がなされていく。国語学者・文法家、文学者、学校教師そして法律家もくわわって、標準語から国家語⇨国語への国家資本化が統合的になされたのだが、日本歴史上最大の転換である、へ日本語ランゲージの地盤替え)が実行されたのだ。そこで、驚くべきは、近代言説の理論化も認識もなされずに、移入だけでやってしまった日本人の文化パワーの凄まじさだ。つまり、かくの如き大転換の「転倒」までもなしたる底力がある、それが数千年蓄積してきた(述語制の文化資本)である。非過去も含め「た」一つになりながら、しかしそこに「き、けり、ぬ、つ、たり、り」の意味作用を無意識に心意識に心意識に表現しているのだ。自覚・認識がないだけである。古語を現代語訳できるのだ。これは、わたしたち日本人は「日本語」の大転換をもって言語本質とその歴史変容における根源的な問題をこなしているの意味する。本書がそこに直面したのは、国際版で吉本さんの良寛論と藤井さんの源氏物語論を英訳したときだ。ネイティブの英訳者は「自分」とは「誰のことか？」と主語を明確にしたいと尋ねてきた。また「人來たりて」は単数か・複数かとやはり主語を尋ねてきた。これが、本書が「述語制言語」世界へと踏み出す契機であった。訳しえないのである。

大転換の言語ブラチックをなした「言文一致」を対象にした。当事者でさえ「言文一致とは何か」を深く認識していないのに実行してしまう、そこに直面した問題構成を浮上させた。言語は本質的に述語表出である、近代言語が欧米であれ人称をともって主語言語化されていったにすぎない。これを近代哲学でさえ明らかにしていない。言語は心身をそして技術規制する。述語制日本語を探究する「山道を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に棹差せば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにく。」——主語などどこにもない! と呻きながら……。

文化科学高等研究院出版局

Email: ehesc@gol.com ehescbook.com

ご注文は「RICK」→ Fax. 03-3294-2177

文化科学高等研究院出版局 tel.03-3580-7784 fax.03-5730-6084

明治期の言文一致と翻訳の言説生産

LIBRARY IICHIKO 148 AUTUMN 2020 1,500円(税別)

ISBN 978-4-910131-03-0 C1010 ¥1500E

書店名

部数